

松島さんのコト

黒崎俊雄

松島さんのコトを良くは知らない。松島さんは、カルチャーセンターの絵画講座の、私の生徒さんである。大学で何を教えているか、何を研究しているか、ほとんど知らない。短歌に関する小論文を読ませていただいたことがあるくらいのもので、その人となりについても、これまたワカラナイ。松島さんの描く絵について、少し解る気がしたのでこの拙文を引き受けたものの、一向に進まず、途中二度程書いて気に入らず、これが三度目の正直というより、アトが無くなって終りにせざるを得ず、脳ミソを揺らして、零れる言葉を拾っているところである。

最初に書き出した時は、「文人画と松島さん」というテーマで書こうとしたが、文人画そのものに迫らざるを得ず、私の手に負えないと分かり、挫折。その中で松島さんには文人画は描いても、文人画家を目指さないで欲しい由の事を書いた。プロとアマ、上手と下手。線引きや、どこに価値を置くのかといったことなど、いろいろとややこしい。もちろん松島さんが文人画家を目指しても、いや画家を目指しても一向に差し支えないことであるのだが。要は良い絵を描くことが大事であって、名称はどうでも良いことなのだ。

二度目の時は、地方に向かう新幹線の車中で書き始めたのだが、松島さんのコトを書きながら、車窓の景色を

その中に入れたり、アナウンスを取り込んだりと、現在進行形の文にしてみたのだが、何かとりとめなく、これも止めてしまった。その時も思ったのだが、結局、自分は松島さんのことが分かっている、知らないということが判った。では何が言えるのか。松島さんの描く絵、そのものを書くしかない、振り出しにもどった訳である。

松島さんの絵は、何よりも色彩が美しい。甘美と言った方が良いかも知れない。これは生来のものであろう。それに人生経験が作用して、磨かれて松島カラーが誕生したように思う。もちろん、その中に陰の色彩もあって、ただ美しいばかりではない。時にはその陰の色彩が画面上で邪魔になることもある。邪魔というより、他の色彩と関係性が保てなく、はずれてしまうのだ。これは私には分からない、松島さんのどこかに潜む陰の部分の現れなのかも知れないと、想ってしまう。

色彩というものは、本人の思いとは別のところからでてくるものらしく、意識的に使うと観念的になり、活きた働きをしなくなりやすい。その反面勝手に出てきて邪魔をしたりもする代物で、御するのは難しい。なぜこの色を使うのか、突き詰めるのは厄介だ。

その点、形は多分に意識的に使われることが強い。オートマチズムもあるから一概には言えないが。色彩は拡がるうとするのに対して、形は留まろうとするから、両者をコントロールするのも大変だ。どちらかを片方に従属させれば治まるが、味気なくもなる。

松島さんの場合、その両者を平面化という方法で生かさうとしているのがみてとれる。平面化することは両者を生かすのには良い方法であるが、特に形を平面化する難しさを伴う。なぜなら、平面化とは奥行きも、ポリユー

ムもなくして、平面上に配置することであるから、見えている形をそのまま画面上に持つて来ると平面になりづらいことが多い。松島さんはその点に大変苦労しておられる。形は意識的に使われることが強いと書いたが、これは説明的にもなりやすいということで、単に図形として平面化されても、その内実を伴わないと生きた形にはならない。

松島さんは人物を描く時、単に対象の形をなぞったりしない。これは人物と松島さんの関係性が他のモチーフ、静物や風景とは異なることを意味する。風景を描く時が一番説明的になりやすい。風景の場合、遠近感が出やすいのと、松島さんの旅行の時の想いが説明的な形を求めてしまうのかも知れない。どこの景色か、あの時はこんなこともあつた等々を画面に持ち込んでしまう結果の気がする。人物の形が一番主観的で、風景の場合は客観的、静物で描く形はコントロールされていて、画面上の存在だけを考えているように思う。これは対象との距離感がそれぞれ違っていて、物理的にも、心理的にも近、遠、中なのではないだろうか。

画面、絵というものは、本人が見えているように、思っているようにできるもので、そんな積もりではないと思つても、表出されてしまうと私は思っている。ただ画面上での不具合は何度も描き直しながら、練りながらより良いものへと変れる、とも思っている。松島さんは良く絵を研究されていて、学びはマネビということであろうか。

色彩、形を画面上に置く絵画行為は、無限のヴァリエーションがあり、また描く人それぞれで様々な姿を見せる。同じ絵の具を使つても、塗り方、厚さなど千差万別であり、色名の概念は同じでも感じ方は違うし、使われ方はその人の一部となつて、画面に立ち現われてくる。絵画は、その方法、技術を修得すればできるというもの

松島さんのコト

ではないので、学ぶことの良し悪しも問題となるところである。現在、私は松島さんに絵を教える立場にはあるが、いつも、絵は教えるものでもないし、教わるものでもないと思いつつ教室でお会いしている。

松島さんが自由に、そして確固とした絵を描かれることを願ってやまない。